岡山地方のはげ山について (3)

——入会慣行と山林状態——

千葉 徳 爾*

1. 入会地の荒廃 記録⁽¹⁾に残っている限り、岡山地方のはげ山は入会地もしくはそれと同様な取扱いをうけていた部分に多い。もちろん藩の御林や給人山がはげた場合もあるが、これらは入札払下げで皆伐又は下蒔落葉掻などの行なわれていた区域らしく、早くから百姓自林であつた山林ではげ山と記されたものは、筆者の知る限りでは認められない。この理由を百姓持であるため藩に記録されなかつたとみるのは疑わしく、個人持の山林の伐採についてすら一件一件願書を提出させ許可した上で伐らせている厳しきからみれば、個人の山林が荒廃した場合に黙認して記録しなかつたとは思われない。従つて農村の私有地よりも入会地の方が荒廃しやすかつたということは、事実であつたと認めてよからう。このことは重要である。即ち入会地という形式は管理に重要な関係をもつからである。岡山地方の入会慣行をもつ山林は野山（ノサン）と呼ばれ、例えば、

「野山者両村為入会、是又土地相不宣、既に終之谷筋砂留数ヶ所相願候程之儀、猥に土地荒し候義致間敷、勿論削芝双方堅差止候（文政7年〔1824〕）」

と、児島郡彦崎村植松入会山論記録⁽²⁾にみられるように、芝土を削りとするような地表破壊がみられた。これは主として水田客土として芝土を掘取つたらしく、全国的にも入会慣行として類例が知られている⁽³⁾。ただ他地では安山岩その他の侵蝕をうけにくい地質⁽⁴⁾であるため土砂の流出は記録されたものがないが、この例では閃雲花崗岩の丘陵であるため土砂の流出がいちじるしかつたと思われる。しかし、現在この地域ははげしていない。次の例は岡山倉敷間の丘陵地のものであるが、

「尤入相之場所草木之根猥りに掘候得者、石砂流落御田地之障りに罷成候間、向後草木之根堅ク掘せ申間敷候

一、右入会相於論所向後歛てうな鎌等入、木之根草根掘取申様成義堅仕間敷候、尤笹かき熊手入にて小石砂なとうき流し、御田地之障に成申義に候ハハ是以仕間敷事」

とあり⁽⁵⁾、これは正徳3年（1713）の西郡村山論にあらわれた入会山林で

* 東京教育大学地理学教室

地理学評論 27 巻6号（1954年6月）

の採取方式の一端とみられる。また宝永2年(1704)の児島郡番田村と香川郡直島村との井島入会山の争いでは⁽⁶⁾、以前の山論手形に番田村の者は生立つた松を伐つてはならぬという一条があつた。その手形を無効にするため、番田村は入札で松の皆伐があつたのを幸いに、以後草刈のとき村の者が言合せて芽生えの小松をすべて草にまぜて刈取つてしまい、森林が成立しないようにしようと相談したとある。

これからみても、一般の村民は森林の保続ということには全く無関係で、掠奪的採取を行なつていたとみられよう。こうした入会地の取扱い方は現在の村々の慣行にも、まだうかがわれるところである⁽⁷⁾。

2. 入会山の位置 入会山林には1村内の住民が入会うものと2村以上の住民が入会う場合とがあり、山争いがおこり土砂流出が甚しくなるものは、後者に多かつた。人口が少なく山野が広大でその利用価値が乏しかつた時代には、誰がどこの山林に立入つても差支えなかつたであろう。集落が密集し、山野の利用が進むにつれてその私有化もひろがつたと思われ、大体からすれば人家に近い部分がまず個人有となり、遠距離ほど利用が進まず人の立入が自由であつたにちがいない。入会山が村々の境界に近く存在し、はげ山の分布が町村界、大字界に近く認められるのはこの理由にもとづくであろう。一つの山体でいうならば、入会地は山頂部に近く存在するのが通例である⁽⁸⁾。例えば和気郡小中山村の入会野山の境界を定めた文書⁽⁹⁾は、

「一、小中山村溺之西、赤土尾父次郎山より吹上平谷の西大松へ見通し、夫より上へ生出

一、ひゝの木谷ハ不殘古林

一、右ひゝの木中程東の平へ生出印致置候、夫より谷を東印立置候、下へ自林上へ野山に可仕、夫より谷之大松之元へ見通し印より上へ野山

一、ひゝの木尾通り西へ廻り権八買山有之由、東より二筋目之大津り筋砂留ノ東に印し立置候、右印より西野山、砂留之内通りより上の尾へ見通し、夫より西之奥清三郎畑之頭へ横通り印立置候上野山(下略)」

このような事例は通常の地形では極めて多く、但馬地方でも「名分山八合」の諺があつて、台帳上では私有地であつても、八合目以上は入合勝手であつて、そのため山腹には大木が茂っているのに、山頂近くは小さな木だけしかないといった光景がよく見られるという⁽¹⁰⁾。はげ山が稜線部や山頂からはじまつて拡大してゆく場合はよく見られ、これを、上昇斜面及び下降斜面という地形上の差異が土壌の発達を左右し、山頂部に粘土質の瘠悪地を形成するためと説明しているものもある⁽¹¹⁾。またそのような地形が

風衝地に当るため、植生不良を来すことも考えられる。しかし、里山に近くこの現象が多く認められ、そこは林内の小路が通つていて最も伐採頻度が高い場所であり、入会地的取扱いをうけている部分であることを考えれば、そこがまず植生が疎らになり乾燥しやすいことは明らかである。

玉野市のはげ山で夏期観測された結果によると、山頂部は南側に次いで地温が高く土壤水分が少ない⁽¹²⁾。従つて乾燥による植生の不良化が山頂部から進行するということも考えられるが、もしそうとすればこの実測では南側が最も地温が高く土壤が乾燥している点からみて、はげる部分はまず南側からはじまらねばならない。ところがはげているのはまず稜線である。従つてさらに他の条件を考慮する必要がある。これに対しては、前に述べたように、稜線上の土壤は流亡溶脱を受け、粘土分をますため植生が悪化すると説明されている。この点は更に吟味を必要とするが、多くの稜線部が久しい以前から人力の影響をうけていたとすると、その土壤状態も果して純然たる自然の形成か否かは疑問である。広島県賀茂郡各村の草山腰林帳をみても⁽¹³⁾、野山には縦横の長さが著しく異なる細長いものが多いのは、入会林野が稜線附近に位置したためと考えられる。

3. 岡山地方の入会林野争論の内容 記録に残るものだけでもこの地方の入会山論は200に近いが、その時期別分布には興味ある現象が認められる。即ち既に述べたはげ山の記事と同じく、和気・赤阪など北東部の内陸山地にまず現れ、児島・邑久など每岸に近い地域では約50年おくれて山論の記事がみえはじめる。次にその内容には隣接するいくつかの村が、入会地の使用目的を異にするための争論が少なくない。例えば一方は牛飼場草刈山にしておきたいのに、他方の村は山林を造成しようとして、それが衝突の原因となる場合である。草山野山は牛の多かつた近世前期に広い地域を占め、後期には次第に山林化して狭められたことは既に指摘されている⁽¹⁴⁾。しかし宝永6年(1709)の布達では⁽¹⁵⁾、

「諸郡村々の内、所には寄申候へ共、野山并牛飼場入相野山に松木はへ出、松木等は御林に成申候に付百姓共より伐取申儀不成埒に御座候。其村給所にて御座候ても生出の松木等給人より伐取申儀、是又不成訳に御座候。野山はげ山の時分給人より此野山に松植置林に仕度との断有之は、郡奉行承知仕郡奉行より相伺給人之林に成申候御定に前々より有之由御座候得共、給人方より右の如くなる留山奉行へ断申参り候儀無座候由に候。近年所々はへ出の松木等生茂り、所々より牛飼場年々無之様に罷成候処数多之由承り申候間、其所見分申渡し遂吟味、はへ出松百姓難儀不仕様に残し置前々之通野山牛飼場に仕度と願ひ申所々、連々に伐払ひ又は裾

切仕遣候様に被仰付候は、耕作の爲に宜、百姓共への御補に可然哉と郡方御用入共申候旨、郡代より相伺書面之通可申付旨老中被申渡」

とあり、必らずしも藩の方針は山林増加のみを強行したわけではない。けれども人口増加と商品経済の発達に階層分化を進め、大家畜を所有せず、肥草と薪のみは需要がありました。これには柴草山の成立が必要で牛飼場の転用が行なわれはじめたのである。例えば正徳2年(1712)の申出として⁽¹⁶⁾、

「児島郡山田村之儀、自林所持不仕者又少宛所持仕居申候＝付繕作事入用等御座候而も足し材木可奉願様無御座、其上下草山も無御座薪之作廻共迷惑仕候。村中之牛飼場を植山＝仕義不勝手之儀も御座候得共、右之通迷惑仕者御座候故、村中寄合相談仕、持来之自林余計所持仕候者共ハ指除、其外御蔵御給知共割符仕、此度牛飼場之野山＝松を植立候ハ、御用にも立、又者預り主共入用之節ハ本木並枝共奉願候様＝被仰付被為下候ハ、難有可奉存(下略)」

とあるのはこの傾向を示すものであろう。これから約1世紀たつと相隣る村々の間でこのような2つの経済構造の差異による争い、いいかえると、大家畜をもつ階層の多少による地域分化がますますはつきりしてきた。児島郡・邑久郡方面でいえば、田井村と八浜村、大崎村と田井村の山論、磯村上大塚と福里村、上道郡矢津村と宍甘村との間の争論などがその例である⁽¹⁷⁾。

4. 農村における薪炭の欠乏 岡山市内の薪炭の価格は市政提要⁽¹⁸⁾によるとこの頃から次第に高くなつてきた。岡山町奉行の施政方針は市中の薪値段をできるだけ低く維持することだつたらしく、他地の薪の価格よりかなり安かつたらしい。天明6年(1786)に出された廻状によると、

「此度薪相場奉願上候処願之通真木懸木銀札一匁＝四貫目かへ相場に被仰付候」

とあるが、それに奉行所の指示として雑木をまぜぬこと、薪の出廻りが好転したら相場を下げよ、この値段は定値段とは認めないなどの条件をつけて許可されている。これは一例で後年この方針をめぐる大きな紛争がおこつたのであるが、それは別に述べることにする。薪炭の値上りはその供給源が次第に遠方に移動してゆくことを示すらしい。平坦部の農村にもこの傾向がみられたと思われる。享保7年(1722)に既に次の御触書が出ているのはその現れであらう⁽¹⁹⁾。

「林有之村々松木並松枝葉盗伐り候義、其村名主五人組頭存入疎候故不締りに有之候、外の物と違ひ家内に取隠し候義難成候、松木松葉有之を見付候は、吃度吟味仕、盗候に極り候は、早速可申出事」

こゝに松枝葉とあるのは製塩業者に販売の目的ではなかろうかという推

定は当らない。5束や10束の松葉では殆ど意味をなさないからであつて、自家用とみなすのが至当である。もしこれらが商品として販売され、製塩その他の用途にむけられるとなれば、集荷機関が必要になるわけであるが、盗伐品を供給源として恒常的な市場なり問屋なりが存在することは考えられないし、その記録もない。同じような制約は宝暦8年(1758)の備中下道郡岡田藩の規定からも知られる⁽²⁰⁾。

「一、下刈り共御他領江売申間敷候(中略)

一、村方商人共菜塩売候代に薪取集買売払候由、此儀紛敷候間自分焼料之外余慶に取置候儀者堅無用之事

一、定芟春芟山之下刈銀立売候儀、御他領江売候事者縦親類内こり共堅無用候(下略)」

岡田藩は小藩であり、附近は各藩領が入りみだれていたので、上記のような方法で薪を売買すると、他領に盗伐した薪を売出しても取締が充分でないおそれがある。此儀紛敷候とはそのことを意味するかと思う。平坦部農村でこのように薪が不足してくれば、その供給のために商人が活動し、または薪市が開設されるような動きがでてくる。既に早くから浦々薪問屋があつたことは述べたが⁽²¹⁾、ここでは1例として賀陽郡(今吉備郡)溝口の薪市について述べてみよう。これは製塩その他の工業燃料と関係のない点で興味ある資料といえる⁽²²⁾。

「備中加夜郡楢谷村見延実栗村山林、自先年御百姓共銘々持来り之林にて御座候、勝手次第に少々伐り枝木下刈等は方々江出し売申候て渡世仕来り申候処に、御国替(池田光政入国)以来、天城御知行所に成候て同所御用人様より被為仰渡候は、御百姓共銘々持来り之林随分念入はえ立申候様に仕、向後は連々御用木に御取せ被為候間、根伐堅御指留下枝下刈之儀は御百姓へ被為遣候間、勝手次第に銘々持来り之分にて枝下刈仕、前々之通売申様にと被為仰付(中略)

一、売木御定之義は下刈小たば 一束之内にかまわりの割木二三本に松葉二三本宛指加、売申様にと被為仰付候」

これは子4月とあるだけで年代不明であるが、推定では文化以前と思われる記事で、薪市そのものはより古くからあつたとみられる。この文中注意されるのは、しきりにその所有が持来りの林すなわち私有林であることを強調し、それから下刈として得たものだから売買差支えないということ述べている点である。これは反面入会地の生産物が売買できなかつたこと⁽²³⁾、御林その他の盗伐品でないことを示すであろう。またこの薪市の存在は、そこで自家燃料を買う必要のある、山林をもたない農民の増加を意

味するといえる。

5. 入会地廃荒の意味するもの このように自林の薪が販売用に出荷されると同時に、同じ地域の入会山林では荒廃が進行していった。寛政8年(1796)の報告によると⁽²⁴⁾、

「備中山北安栗村之内見延野山、村手鑑ニ畝数三十町入合共と書上来御座候。内凡十町安栗村と下草入合にて残畝数凡二十町見延に限り候野山に御座候、此内とよが谷、ひへはこ、日之下山、船場山、のめら谷山、ふかどふ、大ふかどふ都合字七所にて凡見取に引分、十町斗之分此度凡竿先相改候処畝数凡三十町山荒石砂夥敷流出、年々田畑に故障申に付此度村方申談、右山に谷に小松を植付惣林ニ仕度奉存候」
とあつて、入会林野の利用過度の状態がうかがわれる。

この地域の地質は児島地方と同じく、最もはげやすい黒雲母花崗岩から成り、現在も広大な禿禿地帯をもつのであるが、古くからの個人有林にはほとんど禿禿地が認められない。しかもそこから薪市への出荷があつたのであるから、商品生産のための林野ははげず、かえつて自家消費採取の入会林野が荒廃したという事実は大きな意味をもつ。即ち入会山林の荒廃が土砂流出をもたらすほどに過度となつたのは、自家用の肥草、落葉、薪材などをそこに求める階層が、入会地の生産力をこえて増加したことを意味するであろう。岡山地方ではげ山が問題とされたのは寛永以来のことであるが、その記録の量と内容とは共に、近世の前期と後期とで大きなちがいをみせている。前期のものは数も少く、概して藩の役人から村に向つて山林取締を指示命令する形式のものである。ところが後期の天明から寛政にかけて、記録の量が増すと共にそれ以後はむしろ村々から藩に向つて土砂の流出した災害状況の報告と対策上申とといった形式に変つてくることは、これまでにあげた資料を通読しても知られる。

このように農民の環境意識にはげ山がとりあげられ、その対策として入山制限、割山、その他の慣行が成立するのであるが⁽²⁵⁾、根本的には自林を手ばなし、しかも土地から分離できない階層がある限り、入会地の荒廃が進行することはまぬかれなかつた。さらに個人有の山林にも、小前の者が入込んで落葉掻きをすることが黙認されるといつた慣行が⁽²⁶⁾、荒廃を個人有林にまで進展させる傾向を助長した。それも他に下草燃料を求める余地のない事情からであろう。記録によると、入山制限の規定は享保年間以後次第に現れている。それ以前から木挽、大工などが西の方へ出稼に行くことが著しい現象として記録されて⁽²⁷⁾いるのも、商品経済の侵透による土地をもたぬ階層の形成の現れであろう。街道筋の小商売渡世もそのころから

増加している⁽²⁸⁾。やゝ後の資料であるが、こうした無高の農村居住者の増加、貧困化は、次の報告からうかがえる。

「御内意口上（文化 11 年〔1814〕）私組合算津石村之内福石分寺山分共土地柄宜貧者多之場所＝而、追年及困窮難決仕候付、近来御加損米拝借米被仰付候得共、兎角行直り不申＝付折入而吟味仕候処、両所共播州赤穂村々手近＝而御座候処、去ル明和安永之頃より追々御百姓所持之自林夥數赤穂領へ売渡、或者致質入払方之手段＝尽、銀主へ相渡申様に相成、自林所持之者あまり無之、年々困窮弥増申様子に相見申候」

この結果自林でも松材伐出が増加するのであるが、その影響ははげ山を形成するほどではなく、今日いちじるしい禿禿地はこの地域には認められない。しかし、これと同様の過程で貧困者が形成されていったことは、赤穂が製塩の中心として富豪が多かつたと同じく、鹿忍、味野その他の製塩地についても推定されるところである⁽²⁹⁾。岡山藩内の塩問屋がこのころ好況にあり、度々冥加金を少くも表面的には自発的に納めるという願書を出している点⁽³¹⁾からみても、資本主義の芽がそうした製塩地にきざしていたことは認められ、その周辺に小農や日雇が発生して入会地を荒廃させていたと考えられるのである。瀬戸内海沿岸のような乾燥した花崗岩風化地帯でも、全く人為作用を及ぼさなければ、植生恢復には 1 世紀を要しないところが多い。それが現在も依然として禿げており、増大傾向すら示しているのは、人文地理の立場からいえば住民層の貧窮化過程の反映といつて差支えないと思う。

（1954 年 1 月 20 日受理）

参 考 文 献 及 註

1. 池田藩：撮要録，山林之部 同後編，山林之部 法例集，土壤竹木山林取締之事等，特に撮要録。
2. 前掲(1)
3. 遠藤治一郎：日本林野入会権論（1947）p. 45～80。
4. 千葉徳爾：日本の禿山分布の大勢とその要因について 地理学 1 卷 4 号（1953）p. 26～34。
5. 前掲(1)。
6. 前掲(1)。
7. 岡山民俗学会土井卓治氏私信，部落有林野には町村合併当時皆伐売却されたものが多い。
8. 小出博：応用地質（1952）p. 122～145。
9. 前掲(1)。
10. 近畿民俗 1 卷 1 号。
11. 前掲(8)。
12. 日本治山治水協会：瀬戸内地域におけるハゲ山の成因と早期復旧（1953）p. 16～17。
13. 日本林制史調査資料 広島藩。
14. 石田 寛：瀬戸内海地域に於ける畜牛の歴史地理的考察，瀬戸内海研究第 3 号（1952）p. 1～13。
15. 山林共進会報告履歴之部（1883）。
16. 前掲(1)。
17. 前掲(1)。
18. 岡山町奉行所：市政提要 薪之部。
19. 前掲(15)。
20. 下道郡市場村文書 日本林制史調査資料岡山藩に収む。
21. 千葉徳爾：岡山地方のはげ山について（2）製塩業との関係 地理学評論 27 卷 4 号 p. 48～58。

22. 前掲(1) 商工之部. 23. 前掲(3). 24. 前掲(1). 25. その具体例をはぶく. 詳しくは前掲(1) 参照. 26. 前掲(20). 27. 和気絹・備陽国誌 吉備群書集成所収. 28. 谷口澄夫: 金毘羅往来筋村落の商業進展過程 瀬戸内海地域の社会史的研究 (1952) p. 167~198. 29. 前掲(1). 30. 前掲(28). 31. 前掲(18) 塩之部.

THE BARE HILLS OF THE OKAYAMA DISTRICT (3)

—Their relationship to the rural common forest—

Tokuji CHIBA*

In the documents which have been studied, it was noted that there are more bare hills in the rural common forest than in the other lands of the Okayama district. There were two types of rural common forest, one was used by the families of only one village and the other was used by the people of two or more villages. The former is not such a big problem, but the latter is the very subject of this study. In this study the word "common forest" means this type. The common forest is usually located between settlements, on ridges of hills or on the borders of villages. Forestry experts say that the soils of the rounded ridges are clay which are eroded easily for morphological reasons. However, the soil of the ridges are not always naturally eroded but also have been devastated by man's activities.

In the documents we see that many of the common forests have been in dispute between some of the villages. Soil erosion has been noted, because the use of the forest were so wasteful by digging of roots, or by the use of the moss surface. Some people says that the cutting of wood for fuel and timber is the reason for erosion. In fact the requirement for fuel for urban and rural settlement increased due to the growing population and the development of industry. However, the fuel sold commercially was obtained from the private forest, because the products of the common forest could not be sold without compensation to the villages and such cases were very rarely mentioned in the documents.

Thus the author concludes that as the poor class who have no private forest grew with the development of an exchange economy, the common forest were used for fuel by the poor class and much waste took place. Thus the forests are denuded and have not been replanted. The rain weathered the granite hills and the eroded soils made the stream beds higher and higher. This process began from the 19th century near the salt farms and margins of the Setouchi lowland.

* Institute of Geography, Tokyo University of Education.